

# 表現・意味・対象

鈴木 修 一

## 1. はじめに

ことばはさまざまな働きをもっている。感情や意志を表明する働き、行動を指示命令する働き、思想や知識などの情報伝達の働きなど。またさらに、命名あるいは創造にかかわる働きなど。このような働きが可能なのはことばのいかなる特質によるのであろうか。普通それはことばが意味をもつ記号であるからだと思われている。確かにその通りだと思われる。ことばが意味をもつ、われわれはことばに意味を与え、受けたことばから意味を受け取る、このようにしてわれわれはことばのさまざまな働きを利用して言語生活をなりたたせている。拙論においては、このことばが意味をもつという点に着目して、意味をもつことばをひとつの表現として捉え直すことから考えていくことにしよう。

よくわれわれは、「ことばによって……を表現する」という言い方をする。この場合、「表現する」というのはいかなる事態をいうのだろうか。また、「表現することば」と「表現されるもの」との関係はどのようなものであろうか。あるいはさらにこれも表現の一種と考えてよいと思うが、フロイト的に「ことばは思考を顕すよりはむしろ匿すほうにまわる」という言い方もなりたつとすれば、それは表現としてのことばのいかなる働きによるのだろうか。

そこで「表現するもの」としてのことばと「表現されるもの」としての思考や意味との関係から表現を考えてみよう。一体、「表現されるもの」である思考や意味がそれでは「表現するもの」に先立って存在しうるものなのだろうか。日常の常識的なことばの用法においては、「われわれは思考したことをことばで言い現わすと」という言い方をする。この場合「表現されるもの」としての思考がまず先に完成状態にあって、ことばはせいぜいそれを顕在化させるものでしかない。これは「ことばは思考の衣装であ

る」という考えにつらなるものであろう。しかしまたこういう場合もある。物事の名前が思い出せなくてどうも落ち着きの悪さを感じたり、あるいは考え事がうまくまとまらないとき、それを話したり、書いたりしているうちに段々に明確になってきたという場合。この場合にはことばは思考を担い思考を未完成の状態から完成の状態へもたらしめるものとして働いている。思考を顕在化させるといってもこの場合は、いわば「ことばは思考の身体である」といえるような働きをしていると考えられる。

「ことばは思考の衣装である」にせよ、「ことばは思考の身体である」にせよ、(ここでつまるところ「ことばが先か、思考が先か」が問題になるのだが、拙論ではそれは直接問わないことにする。) ことばが思考を顕在化させるものとして、つまり表現となっているのである。もちろんことばだけが人間の唯一の表現形態であるのではなく、立居振舞すべてが表現なのであるがここではことばに焦点を据えて、しかも十分条件としてだけでなく必要条件としての表現のある側面からことばを考えていくことにしよう。

## 2. ことばは表現である

「表現としてのことば」で最初に問題になることは何か。それは非実在的存在としての意味や思考がことばとしての感性的物体、つまり音声や文字へと実在化されるということである。以心伝心という日本語があるけれど、それは心から心へというよりも何らかの身体の所作仕種としての表現が伝わるということであって「表現されるもの」が表現されないままで伝わることではない。必ず何らかの仕方で表現される、つまり感性的物体化されることによるのである。それをただ明確に分節化されたかたちでは示さないということである。感性的物体としてのことばは、実在するものとして、空間時間性のうちで空間的・時間的場所をもち、個物として存在する。感性的物体化を受ける非実在的なものとしてのこの意味は、ことばによってこの世界に空間的・時間的に登場して来て、実在的なものに基礎づけられている(それはフッサールによって「基底づけられた *fundiert*」と呼ばれる働きによると言い変えた方がよいかもしいが)。しかし決してそれは個物化されているということではなく、さまざまなことばのなかに同一物 *identische* として現れうるものとしてである。このような特性をもつものを理念性 *Idealität* または、理念的客観性と呼んでおくと、「表現さ

れるもの」として感性的物体化を受ける意味は、感性的物体化を受けたあとも理念性を保持しているのだと言ってよいだろう。ことばは理念的客観または同一物をもっていると言ってよいであろう。

しかしそれは果して意味に関してだけそうなのだろうか。表現としてのことばということを考えてみると意味を「表現するもの」としての表現それ自体はではどうであろうか。フッサールによれば表現それ自体も理念的客観性をもつのである。

言語それ自身もまた、諸々の単語、文章、言説などへのそのあらゆる特殊化において、……徹底して理念的対象性から築きあげられている。たとえば「Löwe」という語はドイツ語においてただ一度しか現れてこない。それはだれが何回口に出して言おうと同一的なものである<sup>1)</sup>。

われわれは通常会話を交わしたり、書物を読んでいるとき、さまざまな特性をもつ個物としての音声や文字（それらが美しいとか汚ないとか、音色、音低とかなど）を、つまり感性的物体を相手にしているのではない。いつどこでだれがどのようにことばを発しようとするか、感性的物体としてのすべてのことばを介してわれわれが受け取るのはつねに同一のことばなのである。つまり、ことばは表現として、ことばを発する表現する主体としての事実的人間から解放されているものとして受け取られているのである。さらにこうも言われている。

……われわれは……表現という語のもとに考えているのは、明らかにここでいま (*hic et nunc*) 発せられた音声、その場かぎりの同一的で決して繰り返されない響きではない。われわれはスペチエス的な表現 (*Ausdruck in specie*) を考えている。……

ここで「スペチエス的な表現」といわれていることがらは、まさに表現の理念的客観性を良く表現していると考えられる。しかし、この表現の理念的客観性は意味なのではない。ことばにおいてわれわれはこのようにしてまず第一に、だれが発しようが、いかなる状況、いかなる時に発しようが、つねに同一のものである表現、(フッサールの還元理論のなかで使われて

いる用語を使うなら)「中和性変様」を受けた表現を問題にしているのである。しかしだからと言って、われわれはことばを交わしているときに、この「スペチエス的表現」に、つまり、表現としてのことばに従属している理念的客観性を主題にしているであろうか。恐らくそうではないだろう。このような特性をもつ表現としてのことばを介して言わんと欲している言われているものを主題としているのである。むしろ表現は表現しているとき、その表現を素通りされて言われているもの、つまり意味を主題的なものとされているのである。

ところでこの表現の理念的客観性というものは、では絶対的なものであろうか。Löwe という語はその表現形態がいかなるものであれ、Löwe という表現の理念的客観性が問題になっているが、しかし相変わらず Löwe というひとつのドイツ語という国語の語に縛られているのである。つまり発せられる状況という時間的空間的局所化は仮にまぬがれたとしても、ドイツ語を使用する言語共同体に直接間接に拘束されているのである。ドイツ語の言語共同体に属することばを発する表現する主体からは完全に解放されているわけではないのである。デリダはそれをつぎのように言っている。「Löwe という名詞が、その感性的、つまり音声的あるいは表記的な受肉化に対して自由なのは、したがって理念的なのは、事実に・歴史的言語の内部においてである」からその理念的客観性は「相対的」<sup>3)</sup>なものであって、絶対的なものではない。事実に・歴史的言語の主体から解放されるのは意味が主題となる場面においてである。

### 3. ことばは意味をもつ

ことばが表現しているのは意味であり、思考である。これは、たとえば、ドイツ語の言語共同体といったものから解放されているものである。事実に・歴史的なことばの主体から全面的に解放されている。この意味の理念的客観性は、『幾何学の起源』のなかでつぎのように言われている。

この客観性は、すべての科学的形象および諸科学自体を含め、しかもまたたとえば文芸的形象をも含む文化世界の精神的産物の全体に固有なものである<sup>4)</sup>。

「精神的産物の全体に固有なもの」としての意味の理念的客観性、それはどのようなものなのか。これはまず疑いもなく前述の通り実在的なものではない。非実在的な、フッサールの言い方に倣えば、叡知的、あるいは、悟性的存在である。ここで実在的なものと非実在的なものの比較を少しくわしく見ておこう。と言うのは、『幾何学の起源』において問題になっている、たとえば、ピタゴラスの定理と、さきほどの引用ででてきたライオンとにかかわることばでは、そのことばの意味の理念性においても若干のずれが生じて来るからである。

フッサールは『経験と判断』において実在的对象と非実在的对象の相違について述べている。実在的なものの特性はすべて実在的であって、それは「その意味からして本質的に空間時間位置によって個別化される」ものであり、それに対して非実在的なものは「空間時間的登場は特殊に実在的なものに基礎づけられてはいるが、さまざまな実在物において同一なもの *identische* として——たんに同等なもの *gleiche* としてではなく——登場しうる」ものである<sup>9)</sup>。そしてその特性のちがいに応じてその受け取り方も異なるのである。実在的对象（知覚対象といっても良いが）は感覚的受容性の「純粋な受動性のうちでまえもって構成される」ものであるのに対し、非実在的なものは「述定的自発性のうちでまえもって構成される」のである<sup>9)</sup>。

悟性対象（＝非実在的なもの）という事態は本質的に自発的な生産行為のなかにおいてのみ、それゆえ自我がそこに居合わせる場合のみ、構成されうるのである。この行為がない場合、せいぜい受容的に構成される対象たるにとどまり、対象は、その場のなかで知覚可能なものとして存在するが、それを基礎として新たなものが構成されることはないのである<sup>9)</sup>。

実在的对象は受容的把握によって構成され、非実在的对象は生産的自発性によって構成されるのである。さらに、受容的あらわれは対象を受容的に受け取るわけだから、せいぜい対象の顕われ方に関与するにすぎないのであって対象それ自体の生産に関わらないのに対し、自発的生産は顕われではなく対象そのものを生産するという決定的な相違がある。

またその時間性に関して言えば、「自然対象（＝実在的对象）はすべての対象性と同じく、その与えられ際の時間を持ち、それと同時に、それを包括する固有本質的な形式である客観的時間としての自然時間をもっている」<sup>9)</sup>のに対し、非実在的なものは「いたるところにあってどこにもないという無時間性」「ひとつの時間性の様相である超時間性、汎時間性という時間的存在をもつ。」<sup>9)</sup>

以上のように実在的なものと非実在的なものの相異が語られるとすれば、実在的对象であるライオンにかかわることばと、非実在的对象であるピタゴラスの定理にかかわることばはその意味の理念的客観性においても異なっていないだろうか。ライオンは偶然的な実在物である。直接的にしる間接的にしるライオンに接したことのない主体に対してはライオンということばは、ことばとして、その意味の理念的客観性を喚起することはできないであろう。ライオンに出会うという偶然的な経験を介してしかそのことは可能にならない。ライオンは生産的自発性の対象ではなく、受容的把握の対象である。ライオンという語によって喚起されてくる理念存在者たる意味はこのように現実的经验によって左右されるのである。フッサールは『経験と判断』のなかで、非実在的对象物一般についてつぎのように語っている。

芸術作品、精神的形象そのものを規定するこの精神的意味は、なるほど実在的世界に物体化（＝受肉，筆者注）されているが、しかし物体化によって個別化されているわけではない。……精神的意味は確かに世界のなかでその物的な基層によって物体化されるが、しかしさまざまな物体はまさにこの同一の「理念的なもの」の、そのゆえに非実在的と呼ばれる同一物の物体化である<sup>10)</sup>。

こう述べたあとで、非実在物の特殊な例としてライオンならぬ憲法をもちだしてさきほどライオンについて記したようなことを述べている。そしてライオンや憲法のようなことばのもつ理念性を「縛られた理念性 *die gebundene Idealitäten*」と呼んでいる。

……文化形象もまた必ずしもまったく自由な理念性であるとはかぎら

ない、そして自由な理念性（論理的・数学的な形象やあらゆる種類の純粋な本質構造のような）と、その存在意味のうちで実在性と関与し、したがって実在的世界に帰属する縛られた理念性との区別が生じてくる<sup>11)</sup>。

ライオンと実在物を対象にもつことばは、空間的時間的存在に縛られている。すなわち、ライオンということばによって喚起されるその表現の意味がもつ理念的客観性は特定の歴史社会に縛られている。それに対して、ピタゴラスの定理という表現がもつ意味の理念的客観性は絶対的にだれにでも、すべての歴史社会に通用する。すなわちあらゆる可能な空間時間へと解放されている。とすれば、これは対象の理念性にかかわってくる。

#### 4. ことばは対象に関係する

これまでの叙述が若干意味と対象を混同したきらいがなくもなかったのでここでことばの意味とことばの対象との区別をはっきりさせておこう。

たとえば、フッサールの掲げている例で見ると等辺三角形と等角三角形という名辞を考えて見ると、それぞれの表現によって表現された意味は明らかに異っているが、対象として告げられているのは同じ対象である。また逆に、ブセファルスは一頭の馬であるという表現と、この馬車馬は一頭の馬であるという表現をくらべてみると、一頭の馬という表現はいかなる文脈のなかで用いられようと同一の意味をもっているが、その内容としての表現の対象は一方でブセファルス、他方では馬車馬である。このようにしてフッサールはつぎのように述べる。

すべての表現はたんに何物かを陳述するだけでなく、何かについて語っている。すなわち表現はただその意味をもつだけでなく、何らかの対象にもまた関係しているのである。……しかし対象は意味と決して一致はしない<sup>12)</sup>。

しかし一致しない意味と対象はそれにもかかわらず両者共に表現されるものである以上表現において区別されながらも或る関係をもつ。表現が対象を表現することができるのは、表現が意味するということによってであ

る。「表現は対象を、表現の意味を媒介にして表示する（命名する）のである。」<sup>13)</sup>

それでは、さきほど意味の理念性について見たように対象についても同じことが言えるであろうか。ところが意味の理念性は表現が実在的なものにかかわるか、非実在的なものにかかわるかに応じて区別されたのだが、対象に関しては前述のごとく実在的なものに関しては理念性ということは言えそうにもない。以上をざっと整理するとつぎのようになる。

- a 表現の理念的客観性
- b 意味の理念的客観性 { 縛られた理念性  
自由な理念性
- c 対象 { 実在的对象——実在的な客観性  
非実在的对象——理念的客観性

とすると、非実在的对象のもつ理念的客観性とは何でありうるのかという問いが残る。

ピタゴラスの定理も、幾何学の全体も、いかにしばしば、そればかりかいかなる言語で表現されようとも、ただ一度しか存在しない。それはユークリッドの「原語」においても、すべてのその「翻訳」においてもまさに同一のもの (*identisch dieselbe*) である。さらにまた、あらゆる国語において、最初の口述と筆記以来、無数の口頭による発現ないしは文書による記録やその他の記録のなかで、何回感性的に表出されようと、それは同一のものである<sup>14)</sup>。

ここで「同一のもの」と言われているのは、明らかに表現の理念性でも意味の理念性でもなく、対象の理念性、しかも絶対的な理念的客観性である。感性的顕れである表現としてのことばは、すべての感性的物体と同じように、その空間的時間的個別化として世界のなかに位置をもって存在しているが、この理念的客観性はそうではない。それは表現としてのことばのもつ理念的客観性とはまったく異なる。がしかし、この精神的形象もある仕方世界のうち存在していて、それは感性的に物体化する「口述」とか「筆記」によるのである。つまり「言語的身体」<sup>16)</sup>を受け取ること、

「受肉化」によって存在することができるのである。「受肉化」により現実世界のなかに基礎づけられるのである。

……自由な理念性も歴史的領土に現れるというかたちで事実上世界に登場してきて発見されるのであるが<sup>16)</sup>。

つまり、非実在的对象である絶対的理念性といえども天界に鎮座しているわけではないのであって、ひとがその対象について語るつど、表現とすることばが発せられるつど、その対象は、「たった一度」あるいは「一度かぎり」で決定的に現れてくるのである。したがって、これは実在的なものを対象にもつ相対的な「縛られた」理念性をもつことばの場合とは異なるのである。それは、非実在的なものについての表現の意味や対象が受容的に把握されるのに対して、表現行為としての言語行為のそのつどに、生産的自発性によって生成してくる対象であるからである。

## 5. おわりに

以上素描的にことばに関して、その表現、表現の意味、表現の意味に媒介される対象について管見してみた。そしてここから言えることは、

(1) 言語活動はいかなる意味においても人間の精神的行為であってそこには何らかに理念化作用が含まれている、ということである。もっとも端的な経験へ立ち帰って可能な限りのすべての表現を排除しようとしても、何らかの別断行為を行う場合、この行為が「すでに前以って与えられる」社会的痕跡を取り除き、そのつどまったく根源的に行われる場合にすら、「われわれの言語表現が必然的に一般的伝達意味でのそれであり、したがって、何らかの対象表示をする場合につねに少なくともこの第一の理念化が現れて」<sup>17)</sup> くるのである。

(2) 表現、意味、対象、それぞれの理念性といえども何らかのかたちで「縛られて」いるのであって完全に絶対的な「自由」な理念性というものは存在しない。表現の場合は、さし当り、表現が行われる言語(=表現)の共同体に、意味の場合は、意味の媒介によって目ざされる対象性の在り方によって、つまり実在的对象をめざす場合には経験的に「縛られて」いるし、非実在的对象をめざす場合には、それがまさに、最初の感性

的物体化を必要とすることから「縛られて」いる。さらに対象の理念性といえどもそのつどの感性的物体化が必要であるということによって。たとえば人類の絶滅という事態を考えてみれば明らかであろう。

(3) **Communication**<sup>18)</sup> の可能性が保証されるのは表現の理念性によってである。しかもそれはその表現が妥当する表現の共同体に「縛られた」**Communication** の可能性にとどまる。

(4) 翻訳の可能性が保証されるのは意味の理念性によってである。しかしそれも、実在的なものを対象とする場合には、かなり限られた「縛られた」翻訳の可能性であり、経験的に、というよりこう言った方がよければ、実在的に「縛られた」翻訳の可能性である。非実在的なものに関しては、一応絶対的に翻訳が可能であることが言えよう。当然それと一見異なるが、(3) での **Communication** というより、このレベルでの **Communication** と考えられる伝統化の可能性もこの理念性により保証されると考えてよいかもしれない。

#### 註

- 1) Die Frage nach dem Ursprung der Geometrie als intentional-historische Problem, in Hnsserliana Bd. VI. p. 368. (以下 Die Frage... と略記)
- 2) Logische Untersuchungen Bd II/I, p. 42-3. (以下 LU と略記)
- 3) L'origine de la géométrie. p. 62.
- 4) Die Frage..., p. 368.
- 5) Erfahrung und Urteil, § 65, p. 319. (以下 EU と略記)
- 6) 同, p. 300.
- 7) 同, p. 301.
- 8) 同, p. 307.
- 9) 同, p. 313.
- 10) 同, p. 320.
- 11) 同, p. 321.
- 12) LU. Bd. II/I. p. 46.
- 13) 同, p. 49.
- 14) Die Frage..., p. 368.
- 15) 同, p. 360.
- 16) EU., p. 321.
- 17) 同, p. 58.
- 18) 普通「伝達」と訳されるが、私にはどうも適切な訳だとは思われないので、あえて訳すならば「通心」とでもしたい。